



「我に支点を与えよ。さらば地球も動かさん」

小さな力でも、社会を変えることはできるのでしょうか？たとえ険しい道であるとしても、夢を追い続けることができるのでしょうか？エンドオブライフ・ケア協会の活動を始めて4年半が経とうとしています。どうしたら小さな力でも、大きな力に変えることができるのか…。いつも心に留めて活動してきました。

そこでアリストテレスの名言「我に支点を与えよ。さらば地球も動かさん」を引用します。つまり支点があれば、この原理で、小さな力でも、地球のような大きなものでも動かすことができるというのです。本当にそのようなことが可能なのでしょうか？

1980年代のニューヨーク市の治安改善の事例を紹介します。当時のNYは、きわめて治安が悪く、安心して夕暮れ時に街の中を歩くことが難しく、特に地下鉄はひどい状況でした。そこで行われた対策は、犯罪取り締まりではなく、地下鉄の落書き清掃作戦でした。1984年から1990年まで続けられました。次に行ったことは、無賃乗車の撲滅でした。それまで見過ごされていた軽犯罪に対して厳しい取り締まりを行いました。すると、NYの重罪事件の発生が1990年代のはじめと終わりで、75%も減りました。

軽微な犯罪を取り締まることで、「犯罪がうまくいきそう」というサインを減らし、秩序が改善すると、さらに犯罪が少なくなる好循環の自己強化型の循環が生まれます。これはシステム思考を学ぶ上で有名な事例です。

では、これからの日本の社会課題はどうなるのでしょうか。地球温暖化が注目される中、私は、やはり人口減少（超高齢少子化多死）時代に伴う諸問題を憂います。社会資源が限られる中、地域では多くの人々がさまざまな苦しみを抱える時代が来ることを案じています。

一般的に、何かの施策を立案するときには、予算確保が優先事項となります。これは、決して医療・介護だけの問題ではなく、地域全体のコミュニティーの問題です。しかし、限られた予算の中から、お金を奪い合うだけでは、あちらを立てればこちらが立たない、まるでルービックキューブのパズルあわせのような状況になることでしょう。そして、予算がなくなった段階で、施策はストップしてしまいます。

あらためて支点（リバレッジポイント）は何かを考えなくてははいけません。

この活動を通して感じることは、最終的には、社会を動かすのは人だということです。どれほどインフラを整備したとしても、担い手となる人がいなければ、機能しないことでしょう。

どんな人を育てれば良いのでしょうか。苦しむ人に誠実に関わられる担い手です。それも、一部の専門的な資格を持った人達ではなく、万人に分かる言葉で、まねしやすく（学びやすく）、魅力的な内容であれば、その担い手は、限られた時間、限られた予算であったとしても広がっていくことでしょう。そして、集団の中で、ある一定の割

合に達したとき、臨界点として、足し算からかけ算に、そして、べき乗として広がることを夢見ています。夢を語るのは自由ですが、その実践にはエネルギーが必要です。週末は東京で今年最後のエンドオブライフ・ケア援助者養成基礎講座が開催されます。皆さまからの温かい思いをいつも感謝しています。そして、微力ではありますが、苦しむ人と誠実に関わられる担い手が増えるために全力で走り続けます。 小澤竹俊

半日体験型緩和ケア研修会 in めぐみ在宅クリニック

2019年12月14日（土）午後半日体験型緩和ケア研修会をめぐみ在宅クリニック研修室で開催いたしました。全国から36名の参加者がありました。苦しむ人への援助と5つの課題を紹介しながら、援助的コミュニケーションについて、反復・沈黙を中心に学び、その後、事例検討を6人グループで行いました。参加者の半数は初めての方で、医学生も2名参加されました。これからも、このテーマを学ぶ機会を準備していきたいと思っております。

ダイヤモンドオンラインで紹介されました

「3000人を看取った在宅診療医が、50代ビジネスマンに伝えたいこと」というタイトルで、ダイヤモンドオンラインで院長が紹介されました。反響も大きく、アクセスランキングでもしばらく上位で読まれていました。取材をして頂きました医療ジャーナリストの木原さま、ありがとうございました。



診 療 実 績

	2006- 2018年	2019年 1月-8月	9月	10月	11月	2019年 計	総計
訪問回数	70,753	7,011	836	855	831	9,533	80,286
自宅永眠	2,252	160	18	11	14	203	2,455
施設永眠	349	45	2	4	2	53	402
在宅 (自宅+施設)	2,601	205	20	15	16	256	2,857
病院永眠	711	52	7	9	6	74	785